

第5章 資料編

1. 運営指導委員会の記録

(1) 運営指導委員

所 属	職	氏 名
奈良教育大学	学 長	加藤 久雄
甲南大学経営学部	教 授	北居 明
NPO ナラ・ファミリーアントﾞフルト	代 表	アダルシュ・シャルマ
マサキ株式会社	社 長	正木 寛
奈良教育大学	教 授	赤沢 早人

(2) 第1回

○参加者：加藤 久雄、アダルシュ・シャルマ、正木 寛、赤沢 早人の各委員
学校教育課長 大石健一、高校教育係指導主事 新子康夫

○期 日：令和元年7月27日（土）

○本事業の進捗状況説明

- ・今年度事業の要点（昨年までの取組を踏まえて）
- ・教育課程表について ☆追加資料【教育課程表】
→特筆点：グローバルコミュニケーション科目の継続、文理を問わない「課題研究」、「未来への航海図」へと繋げる「総合的な探究の時間」の試み、全ての生徒が自分の進路と関連づけて課題研究ができる体制作り等。
- ・新事業の趣旨と本校計画の方向性、コンソーシアムの形成等
- ・年間指導計画と外部発表等の計画について
- ・「課題研究」に向けた取組
- ・国際交流、留学等の取組
- ・本日の「未来創造会議」について（発表した3年の学びについて、2年で実施したディスカッションの内容と趣旨について等）

○協議

SGH事業の取組で進学状況に変化が見られたか。

- ・SGH事業の取組で進学状況に変化が多少見られた。具体的には、国際教養大学、関東や東北へギャップイヤー入試(南アフリカへ研修)がある。国際的なことに関心のあった生徒が、入学後、取り組む機会に恵まれている。
- ・英語でのプレゼンテーションは分かりやすくよかった。聞いている生徒は理解できているのか疑問である。奈良先端技術大学院の留学生の英語は国のなまりがあったが、グローバル人材という意味ではどの国のなまりでも対応しないとイケない。聞いている側の理解力が乏しくディスカッションになっていない場面があった。互いの理解力が乏しくQ&Aになっていないことが今後の課題である。
- ・ディスカッションの内容としては、良い悪いではなく、問題の解決など方法について議論を展開してもらいたい。
- ・課題研究発表や調べ学習というより、自分の意見や主張を述べることができていた。
- ・ディスカッションが成り立つためには、自分の意見を言えるような雰囲気が必要である。

クラスセッション(会場：各教室)

- ・机を自然な円形状にするなど良い雰囲気作りができ笑いもあり活発な議論があった。
- ・ディスカッションを活発にするには、話題を家庭に持ち込むなど、人の話を聞き整理することも必要である。
- ・理系のクラスでは議論が活発でないと感じられた。
- ・理数系の生徒には、マイクロプラスチック問題などの環境問題は研究テーマとなる。大学では1・2年で教養は終わり専門となるが、教養を学び続ける必要がある。
- ・生徒がSDGsカレンダーのような学びのカレンダーで年間学習計画を認識する必要がある。
- ・SSHの研究では、議論を狭く突き詰める展開があるが、今日の議論は浅く広く議論を広げてしまっている。一つのことを極める視点を持ち、文理を超えた幅広い研究テーマに発展できる。
- ・働き方改革が叫ばれる中、先生方の業務が大変であると思うが、成果が積み上がってきていて頼もしく思う。この取組を発信し、志を持った生徒が入学してくれることを期待する。

(3) 第2回

○参加者：加藤 久雄、アダルシュ・シャルマ、正木 寛、北居 明の各委員
学校教育課長 大石健一、高校教育係指導主事 新子康夫

○期 日：令和2年2月15日（土）

○本事業の進捗状況説明

- ・SGHでの実績・反省をふまえて（①実生活や社会との関わり、自身のキャリアとの結びつきを意識する②課題研究の深度をさらに深める③教員の負担を均等化する等）
- ・授業の取組について（現代社会、グローバル国語、グローバル英語、現代の課題α等）
- ・アドバンストコース5期生の外部発表、コンテストへの参加、フィールドワーク等について
- ・来年度「課題研究」実施に向けた活動の報告（研修、生徒ガイダンス、グランドデザイン策定等）
- ・来年度研究計画の概要
- ・次年度「課題研究発表会」の内容変更について。
- ・次年度「課題研究α」（アドバンストコース）の変更について
- ・来年度に向けた課題（①より主体的にコンソーシアムとの連携を深めていくこと②事業における地域との連携方法を構築すること③データ、事例の活用等）

○協議

- ・自分たちが行う提案に課題点や限界がないかを考えることが必要である。
- ・自分たちが扱うことができるレベルに問題を具体化したことは良い。
→対象を具体的にもっとローカルにしても良いのではないかな。
- ・楽食プロジェクトをはじめとするデザイン思考がとても良いと感じた。
- ・外部へ出て、自分の目で見たり参加したりする機会が増えてきて良いと思った。
- ・プレゼンの後にディスカッションなどができる場があれば良い。
- ・課題研究のテーマはより身近で自分事であるべきだ。
- ・楽食プロジェクトのように、学校の魅力を県内の小中学生へ向けて発信する取組を続けてほしい。
- ・資質能力ベースの到達目標が達成されたかどうかを客観的に確認する方法が必要である。
- ・課題研究の取組は研究者の養成が主目的ではなく、生徒に身につけさせたい力が先にある。
- ・テーマの分散を指摘したり、研究をより自分事にするような助言をしたりするような指導教員が必要。
- ・発表会司会者の指導に留意と工夫がほしい。司会が質問者と発表者を取り持つようにすること。

2. 新聞報道等の記録

A I G高校生外交官プログラム 朝日新聞 2019年6月20日(木)

「高校生外交官」 Let's study NARA

A I G高校生外交官プログラムで夏休み中に米国を訪れる県立畝傍高校の大枝里奈さん(2年)が18日、県庁を訪問した。米国の生徒らに「奈良の魅力」を紹介するため、県観光プロモーション課を取材した。

同プログラムは今年で33回目。全国から選ばれた高校生40人が夏休みの約3週間、米国に滞在して、現地の高校生と生活しながら、国際問題や文化について議論する。大枝さんは約800通の応募から書類審査、英語の筆記試験や面接などの2次選考を通過し、奈良県からただ一人選ばれた。

観光プロモーション課課長補佐の田中義明さん(48)が現在の奈良の観光について解説

畝傍高・大枝さん 夏休みに米国へ



奈良の観光について取材する大枝さん(県庁)

し、大枝さんは手元のノートにびっしりとメモを書き留めた。紅葉シーズン限定の柿の葉寿司や寺に泊まる「宿坊」など、奈良の観光資源に興味津々の様子だった。

大枝さんは取材後、「春の桜で有名な吉野の秋や冬の美しさなど、まだ知られていない奈良を発信していきたいです」と話した。

(竹中美貴)

フィリピン語学留学 奈良新聞 2019年11月6日(水)

畝傍高生3人が「語学留学体験」

フィリピンの英会話学校に

奈良新聞社主催の「High School Meeting 2019」を村本建設が協賛したことが縁となって、出場した畝傍高校と村本建設が協力して高校生3名を語学留学体験に送り出した。場所はフィリピンのスービック経済特別区。フィリピンは英語を公用語とする世界有数の英語大圏であることはあまり知られていなかったが、ここ数年、日本からの語学留学が目立っている。

今回は、県立畝傍高校の2年生3人がスービックを訪れ4泊5日の語学留学を体験する様子を紹介する。



本学生のフェイスを熱心に向ける人

英語力向上、チャレンジ精神も

高齢化問題に高い関心

奈良で東アジア地方政府会合 観光振興も議論



記者会見する各自治体の代表ら—いずれも奈良市三条本町

■参加した地方政府

- 【中国】河南省、陝西省、成都市、西安市、洛陽市、宿州市、臨沂市
- 【インドネシア】西ジャワ州
- 【マレーシア】マラッカ州
- 【韓国】京畿道、忠清南道、慶尚北道、慶州市
- 【日本】山形県、福島県、福井県、山梨県、岐阜県、静岡県、三重県、和歌山県、鳥取県、島根県、徳島県、香川県、高知県、熊本県、奈良県、甲府市、高山市、奈良市、天理市、橿原市、御所市、葛城市、斑鳩町、三宅町、明日香村、広陵町、下市町

観光・福祉・医療をテーマに、地域の発展に向けて議論した。第10回東アジア地方政府会合。7日に奈良市のホテル日航奈良で開かれた会合に、日中韓など5カ国40地方政府（自治体）の代表らが集まった。なかでも高齢化問題は各自治体の関心が高く、社会保険料の増大や孤独死など共通の課題が挙がった。

会合は今年で10回目。冒頭には記念特別講演があり、谷野作太郎・元駐中国大使が「ともに汗をかき、共栄をめざすことが大事なテーマだ」と訴えた。

その後、「観光振興」「地域で支える福祉・医療の充実」の2テーマで議論がスタート。「観光」では、進行役の藤谷浩介・日本総合研究所主席研究員が「観光客を増やすだけでなく、地元産のものを消費してもらうことで地域活性化」と強調した。

インドネシア・西ジャワ州は、ビッグデータなどITを活用した「スマート・ツーリズム」に取り組んでいると報告。中国・成都市は、金銭約1万7千億元にわたる道路の緑化を進め、快適なまちづくりを目指していると説明した。

国際交流体験「今後も」 畷傍高校生ら運営に協力

会場では畷傍高校の生徒たち11人の姿も見られ、時おり英語を交えながら参加者に座席表を渡し



外園の参加者と交流する畷傍高校の生徒たち

「福祉・医療」では、本太郎・中央大法政大学教授が進行役を務めた。先進的な事例として広陵町の取り組みが取り上げられ、山村吉田町長が、小学校区単位で健康教室を開き、介護予防や住民の交流につなげていると発表した。

一方、韓国・忠清南道は、高齢者の自殺や地域間医療格差が問題になっていると、そこで、広陵町は交流を促した。中国・宿州市は、在宅介護を中心に老人ホーム整備を進める一方、介護人材の確保に苦慮している現状を伝えた。

会合後の記者会見で、日韓関係の悪化について聞かれ、忠清南道の代表は「国同士が対抗しても地方は友好的でいたい」と話した。また、来年の開催地は西シ

畷傍高などランクイン

高校生ビジネスプラン(GP)表彰式

日本政策金融公庫（日本公庫）の高校生ビジネスプラン・グランプリで、全国100位以内に入った高校生年の表彰式が26日、大阪市北区の関西大学梅田キャンパスで行われた。県からは畷傍高がランクインした。

式典では、日本公庫附近畿地区管内（奈良県、大阪府、和歌山県）でランクインした13プランを披露。西大和学園（2プラン）、畷傍高（5プラン）、県立分校もそれぞれ発表を行った。

このうち西大和学園の「Shake&」は、タピオカの原料のキッサバを使ってカンボジアの水質



記念撮影する西大和学園「Shake&」のメンバー—大阪市北区の関大梅田キャンパス

を改善する内容。畷傍高の中村結さん（17）は県産材を使って生体使用できる学習機のプランを紹介した。中村さんはプレゼンテーション力が秀でた。将来的に起業を視野に入れたと話した。

